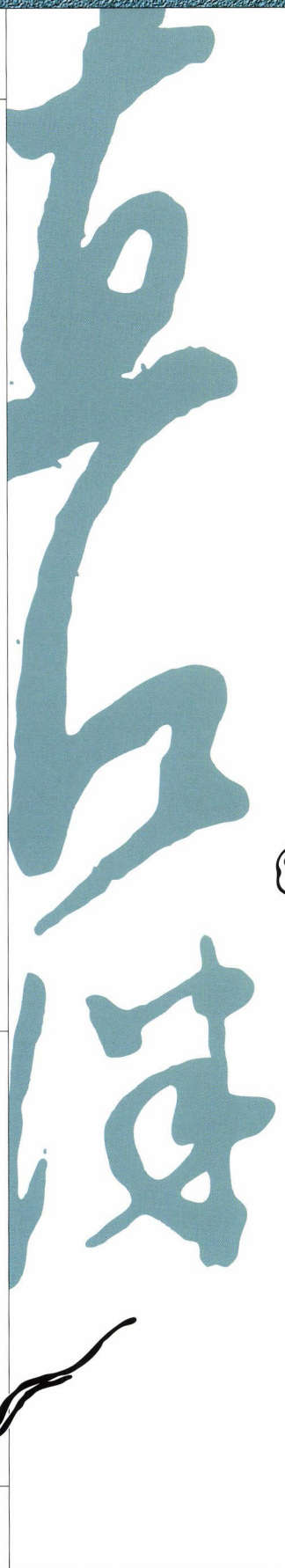
2019・1号

直江の津



◉特集1◉
高田世界館館主―岸田さんに聞きました
このまちの見方・活かし方

◉特集2◉
驚き、江戸時代生まれの座談会

巻頭エッセイ◉わたしの直江津
雨のち虹、そして晴れ

頸城の空間を駆ける 国府―春日山―府中―直江津へ
川と用水
～高田平野を穀倉地帯とした主役たち～

◉上越なおえつ信金倶楽部◉

44号

2019・6-2019・12

雨のち虹、そして晴れ

石川昌弘

遠くの雪山と近くの日本海を見ることのできる直江津の人は幸せです。美しい自然の恩恵で「気分をポジティブ」に変えることができます。

仕事で思い悩むことがあると自宅（五智）から歩いて十分位の「親鸞聖人上陸の地」に行って、目の前に広がる日本海と空を眺めて深呼吸をします。心がリセットされて元気が出てきます。今日・明日・未来に思いが広がります。

七年前に東京から直江津への転勤内示があり、「大赤字」会社の再建を託されました。昔は良い会社だったのですが、いつから歯車が狂ってしまったのでしょうか？　商社の知人からは、新しいことを提案しても挑戦しないダメな会社と言われました。環境変化に対応しない、座して死を待つ「ゆでガエル」のような会社になっていました。内示の日、家に帰った時に、結婚してから一番暗い顔をしていると言われました。しかし、不運を嘆いても前に進みません。上を向いて歩くしかありません。

管理職たちに「会社を良くする提案」を提出させました。会社内では過去の発想にとらわれるので、中央一のレインボーセンターに集合させました。普通の会社になるために何をすべきかについて「終日」話し合い、会社再建のビジョンを作りました。そして実行。「ぶれない、自分たちが決めたことは必ずやる」と誓ってＰＤＣＡを回しました。最初から全社員が協力してくれたわけではありません。社内で前向きな人を探して私が実例を示して最初に取り組ませ、その成果をほめました。「あなたたちもやればできる」と言って全職場に展開しました。いわゆる「モデリング」の実践です。今まで挑戦することを回避していただけで、もともとはポテンシャルがある人たちでした。猛スピードで経営改善が進みました。一年半後、黒字に転換しました。この間の劇的な変化を思い出すと涙が出ます。

通常はこれでハッピーエンドです。しかし、「黒字になってボーナスが増えて良かったね」と現場の人に言った時に、思わぬ言葉が返ってきました。「こんな忙しさが続くと思うとゾーとする」。

ショックな発言でした。給料が増えるだけでは社員は幸せにはならないと反省しました。そこから「顧客に貢献し、働きやすく、生産性の高い会社づくり」が始まりました。

昨年、顧客視点で経営を革新している会社として「新潟県経営品質賞知事賞」を一三年ぶりに受賞しました（一二年間受賞企業なし、上越の会社では初受賞）。更に、厚生労働省の「働きやすく生産性の高い企業・優秀賞」を受賞しました（日本中小企業のトップ3）。ちなみに、当社の有給休暇取得率は九四％、男性の育児休業取得率は一〇〇％です。育児協力のために、男性社員向けの料理教室を社内で毎月開催しています。そして今年五月、社員の上野康秀さんが「業務に精励し、他の模範となる技術と事績を有する人」として「黄綬褒章」を受章し天皇陛下に拝謁しました。

当社はブログ「あしたのジョーエツ」で、地域の魅力を紹介する地域活性化支援を行っています。「ひぐちキミヨさん」に上越の名店等のイラストを毎月二枚作成して頂き掲載するとともに、そのイラストを使って毎年ほのぼのとしたカレンダーを作成・贈呈しています。今年は液晶ディスプレイにひぐちさんのイラストを次々と表示するデジタルサイネージを作ろうと考えています。高田小町や直江津のどこかに設置できるといいのですが。

こうした活動のヒントになったのは長野県飯山市で老人の写真を紹介するフリーペーパー「鶴と亀」と「高橋まゆみ人形館」です。世の中にはヒント（良い事例）が沢山あります。単なる物まねではダメです。お手本にして、独自の工夫を加えねばなりません。「心のふるさと道」を歩き「親鸞聖人上陸の地」で気分転換しアイデアを練っています。

林芙美子が「日々の生活に疲れ、傷心を癒す旅に選んだ先」が直江津でした。直江津の自然の恩恵と歴史・行事・日々の営みに不思議な力があります。「心をリセットする癒しの町」として再認識してほしいと思っています。

暗い気持ちで転勤してきた直江津ですが、潮風・川風・山風に吹かれて刺激を受け新しい人生を過ごすことができました。雨のち虹、そして晴れのような心境です。



石川昌弘さんの自己紹介

日鉄工材㈱代表取締役社長
東京の下町（荒川区）で生まれ、東京の田舎（町田市）で育つ
高校でラグビー部、大学でミニコミ誌発行サークルに所属
東京以外に茨城（鹿嶋）、大阪、福岡（北九州）などで勤務
休日はおんぼろカメラを持って町歩き
直江津・高田図書館を頻繁に利用、夜は古い映画・ドラマの鑑賞

＊編集室から：日鉄工材さんは、ライオン像のある館で入社式を行っています。

ロングインタビュー・令和元年5月9日

聞き手・北越出版　佐藤

このまちの見方・活かし方

■高田世界館館主―岸田さんに聞きました

―岸田さんとは、なんとなく長い付き合いですが、日活（高田世界館）と関わるきっかけやまちづくりへの思いを具体的に聞いたことはありませんでした。今日はそのあたりをお聞きします。まず私ども二人の出会いから。

岸田　「さんずいの会」（落語家柳家小満んを招いて定期的に開いた落語会）ですよ。

―さんずいの会報に書いていますね。下連雀（東京都三鷹市）の居酒屋で落語家と遊んでいたっていう話を。その岸田さんがUターンすることになった事情は。

岸田　親が病気になったんで、戻って来いよと言われて。武蔵野美術大学の油絵で院を出て、そのまま向こうで絵をやりながら、それだけでは食べていかれないのでデザイン業をやって生活していたんです。そういうわけで、紆余曲折もありましたが地元のデザイン会社に勤めることになりました。



明治44年芝居小屋として開館。大正4年映画館「日活世界観」に。平成21年「高田世界館」として再生。擬洋風建築の日本最古の映画館は近代化産業遺産、国の登録有形文化財に指定されている。写真は昭和4年刊「新潟県肖像録」。

―平成一五年に「さんずいの会」を日活でやっているんですが、岸田さんの落語会の方が先ですね。白鳥さんと同級という縁で落語会をやることになったと……。

岸田　上越ＴＭＯ（タウンマネージメント機関）で落語会をやったのが（世界館での＝当時は日活）最初です。

―景観劇場ですね？

岸田　三遊亭白鳥が真打になった時、落語会を雁木通プラザでやったんです。翌年にＪＣＶができて新社屋でやろうということになったんですが、当時、商工会議所の副会頭をやっていた大島精次（故人）さんが、ＴＭＯで高田日活を使ってほしいと……。大島さんは、ここを拠点に本町活性化を考えていた。

その時、初めて熊谷（館主）さんに借りに行った。景観劇場という変な名前ですが、落語と音楽と映画もやっていたんじゃないのかな。

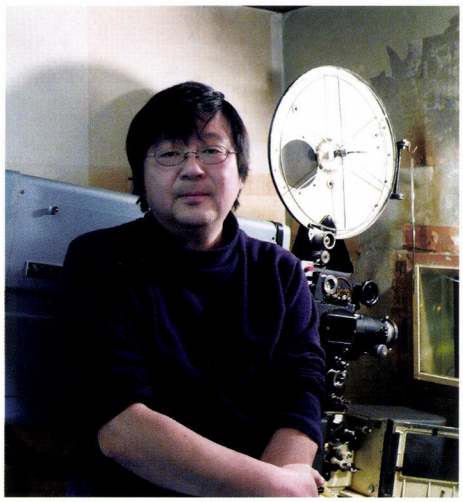
―上越ＴＭＯというと関（建築家　あわゆき組―高田の雁木・町家の保存活用めざす会の創設メンバー）さん。

岸田　そうそう。上越市で出していた「景観」という雑誌の編集委員でもあり、そこで取り上げたり、町屋の活用とか、あわゆき組でなんとかしようという活動が広がりつつある時期でしたね。

じつは、みんなこの映画館〈日活〉が嫌いだったんですよ。成人映画だから、きわめて評判悪かったんですよ。あんなもの残すぐらいなら、その金、どっか他の所へ使えって、さんざん言われましたよ（笑）。

―岸田さんは日活の建物の文化財的意義よりも「これを核にしてこのまちをなんとかしたい」と言っていた、と思っていましたが。

岸田　ここのサイズがちょうどよかったんです。客席が二〇〇ぐらいでしょ。南北厚生会館もリージョンプラザも文化会館も大き過ぎだなと思っていた時、ちょうどこの映画館があったんです。声の通りもよかったし、マイクも必要ないし、「まだ使えるし」っていう程度なんです。古いもんに興味があったわけでもないし、映画に興味があったわけでもない（笑）。



岸田國昭さんのプロフィール
昭和38年、旧板倉町生れ。高田高校・武蔵野美術大学大学院油絵コース終了。㈱高田広告舎プラステン代表取締役・ＮＰＯ法人街なか映画館再生委員会・高田世界館代表・高田小町「おもて屋」代表として活躍。その活動が評価され、地域活性化にかかわる賞を多数受けている。

一年に一回ぐらい世界館を借りて落語会をやるぐらいが世界館との縁。それでも白鳥の後援会を作る時、大島精次さんとやり取りしているうちにいるうちに、みんなと知り合いになってきて、何かとやりやすくなった。

―ＮＨＫの「家族に乾杯」が来たときは。鶴瓶さんも昇太さんも世界館を見ていないんですね。白鳥さんの落語会をやっていくうちに…。

岸田　そう。見てない、見てない。笑福亭鶴瓶さんが世界館にやって来られたのはその後です。白鳥はその時にはいなかったんですが、三遊亭白鳥の出た町ですよっていう話をして。春風亭昇太さんは清水交換で来ていて知っていたし。白鳥と昇太さんはＳＷＡ（すわっ＝創作落語集団）やっていて非常に仲が良いから、白鳥の実家の自転車屋（模型店）はここなんだよって教えて。それで「ここで落語会をやりたいね」と言ったら、鶴瓶さんも「やりたいね」という話になって、それで落語会を。

―私の記憶では、ここを何とかする！　って、デザイン会社を辞められた。

岸田　ＮＰＯ（ＮＰＯ法人街なか映画館再生委員会）を作っちゃったんで、ここの番もしなくてはいけない。近くに事務所を作って自分でやってみるかって、辞めたわけです（笑）。

―これも私が勝手に理解したのかもしれないのですが、ちょうど長野の善光寺大門通りに〈ぱてぃお大門蔵楽庭〉ができました。それをプロデュースしたコンサルタントが、世界館を核にして地域おこしをやればいいと盛んに言っていたのですが、その時、岸田さんは？



上 / 明治の面影を残す高田世界館の外観
下 / 広場を土蔵が取り囲むパティオ大門

岸田　世界館の前、現在空き地（市有地となり、広場としての活用が期待されている）になっている土地を取得して、こういう風にしたいって、私が絵を描いて言いだしたら、コンサルタントがそれに尾ヒレを付けて…。

―自分で企画したみたいに（笑）。

岸田　そうそう。その空き地を取得して事業をやろうと思ったとき、高田地区に中活（中心市街地活性化事業）の事業が行われていて、本来、本町六丁目はエリアではありませんでしたが、入れさせてほしいと、商工会議所に無理やり直談判して。――どこからお金が落ちて来るかもわかりませんからね。

―岸田さんが？

岸田　結局、調査事業という形で六丁目まで中活の仲間に入っちゃったっていうのが始まりですね。

それで絵を描いて企画を立て、大島青精次さんと相談して土地の競売に参加したんですが、ぎりぎりで負けてしまった。しばらくじっとしていたら、そのうちに商工会議所が絵を見て見積を取ってくれて、動きが出るかと思ったら、それどころじゃなくなって、大和デパートが撤退しますと……。

会議所的な大々的な開発するっていう発想には、―自分らみたいな、ちょっと周囲に声をかけて事務所を作って―というアウトロー的発想はない。そういうやり方ではまちは作れないっていうスタンスかなって思ったりもしました。

しかし、このままではダメなんで、労金の財団へ行ったり、補助金をくれそうなところは、みんな顔を出してコツコツお金を集めて。年間の維持費が一〇〇万円ちょっとかかるんです。ですから貸館やりながら維持して、修繕費は上越市の歴史的建造物整備支援事業に申し込んで修繕できたからなんとかなった。それができなかったら、どうにもならなかったですね。

―岸田さんは今、全体の運営に関わる立場ですか。

岸田　そうですね。ＮＰＯ全体の運営は私がやって、映画を選んだり、イベントを企画するのは上野廸音（みちなり）君に好きにやっていいよって任せています。

―上野支配人さんは映画の勉強をされていたって聞きましたけど。

岸田　横浜国立大の出身で、修士論文が台湾映画を取り上げたくらい、映画が好きなんですよね。

―スタッフの給料は？

岸田　何かをすれば人が入りますし、今まで熊谷さんが一人でやっておられたでしょ。だからスタッフさえ充てちゃえば、一人でもなんとかなるって、はなっから分かっ

ていたんだけれど、やってくれる人がいない。

―岸田さんじゃあねえ。

岸田　映画嫌いだもん（笑）。でも、映画好きが最初から一人でやっていたら、続かなかったと思う。割り切りができないんですね。

―思い入れが強すぎて。

岸田　そう。思い入れが強すぎるとダメなんです。

―岸田さんがいて、上野さんがいてというのが、ちょうどいいんですね。岸田さんは、世界館をどういう風にしたいと思っていますか？

岸田　基本は映画館ですね。スクリーンがあるのだから映画を中心にやりたいんだけど、上演できる映画は限られるんです。映画だけではスタッフが増えると賄えないし、発信力が弱まってしまう。たくさん人を呼ぶためには映画につながるイベント、関連した事業を行えばうまく人が寄って来ると思っています。だから支配人には「好きなようにやりなよ」って言っているんですがねで。

―長期的な企画書を書くのも大切だけど、「やろうやろう！」っていう発想も必要。でも、「失敗したら誰が責任取るんだ」って言い出したら、ものが動かないし出来ないでしょうね。

岸田　うちではそれは〈ナシ〉にしているんです。とにかくやりたいものをやろう。やりたいものをやって、失敗したら次をやろうって…。

―その踏み込みができるとイベントって出来るんですけれどね。でも、失敗したらその後どうするんだろうって思うとダメですよね。

岸田　そうそう。だから、それは無い。「失敗しましたー！」ってなったら、「次いってみよう！」って。そのトライ&エラーで、うちはずっとやっているって感じです。

―劇場のような企画は考えていないのですか？

岸田　人形浄瑠璃（佐渡・猿八座公演）、あれはあれで別の場所でやれたら面白いと思うし、やはり映画館というのは映画を上演するとろであってほしいと思います。

　映画館の良いところは何かというと、例えば今「誰がために憲法はある」を上演しているんですが、これはどちらかというとリベラルな内容ですよね。翌週になると、例えば実在してはいませんが「憲法は国民のためにある」というような映画をやるとすると、今度はどちらかというと右寄りなものになりますね。つまり、そのたびに人が入れ変われる。同じところでやっているんだけれど、どちらかに偏るわけではない。映画館は、そういう場所であって欲しいと。

―映画における表現の自由の場所であると。

岸田　そうそう。コミュニティ映画館だと、どちらかというとリベラルな、社会に物申す的な人が集まるっていうのが多いでしょ。

―そうですね。どちらかというと、ほとんどそっちに行きそうな…。

岸田　行きかけているんですけれど（笑）。まあ、そういう人しか来ないからね。だから、ここは触媒であって

ほしいんです。炎上するぐらいあおって、沢山の人が見に来てくれるのもいいんだけれど、物（世界館）自体は変わらない。というスタイルでの発信の場所というのが理想でしょうね。

―そうすると落語会をやるとかは付け足し…。運営していく中で〈映画館はこうあるべき〉、みたいなものを岸田さん自身で発見した。

岸田　そうそうそう。映画ってあらゆる分野のものが入っているので、色々なものを発信できるんです。仮にここを舞台にしてしまったら舞台しかできないし、音楽だったら音楽ばっかりになっちゃうし。

―舞台や音楽はやってもいいけれど…。

岸田　小さい映画館ですから、映画の上演だけでは無理なので、色々な発信はあってもいいと思いますが。

―当初は「続くのかな」という余計な心配がありました。

岸田　映画館で映画を観ようという人たちを耕していかないといけないのと、経営の車輪を作っていかなくてはいけないのかなというのがあります。

―当初、日活なのだから石原裕次郎映画の常設館にすれば、全国から客が来ると言われましたけれどね（笑）。お話を聞いていると、そういうことではない。

岸田　言っていましたよね。やってみてわかったのは、初めてここで映画を観た人一〇〇人中一〇〇人、口をそろえてここで「ニュー・シネマ・パラダイス」（イタリア映画・映画技師と少年の心の通い合いを描いたジュゼッペ・トルナトーレ監督の名作）を観たいって言うのね。館の雰囲気からそういう印象を受けるからだろうというのは分かるけど、やってみたら満杯に入るわけでもないし、みんな飽きてきちゃう。それはなぜかと言うと、みんな新しいものを欲しているからで、やはり、今の映画を上演していかないといけないってこと。それはやってみて気が付いた。「新しいものをやっていかないといけないねー」って。

―たしかに「ニュー・シネマ・パラダイス」や寅さんとかをやって、という声は判りますが、それで経営できるんだったら苦労はしない（笑）。やっていたら潰れていたでしょうね。だから学びの交流館などでやっている「懐かしい映画の鑑賞会」のようなものは、時々やるから成立するわけですね。それを世界館でやったらダメなわけですね。

岸田　そうそう。最初、世界館でやったんです。視聴覚ライブラリーの所蔵作品は、貸してもいいけれど、お金をとっちゃダメ。だから映画館の維持保存費という名目でワンコインというグレーゾーン……。初めてここで〈四九市（しくいち）映画祭〉というのが出来たんです。でも、ネタが尽きてきた。その時はディフェンス一方だから、守らなくてはいけないものは無いし、常設でかけられるものも無いし、人はいないしで、熊谷さんにかけてもらっていたら、そうしたら学びの交流館でもやりたいということで始めました。

だから新井でやる時はそこから始めますよ。手っ取り早く人の興味を集めるにはそれが一番。

―その新井地区で、どうして2号館を開くことに？

岸田　映画館を開くといっていても映画館ではなくて、

映画館という名の高齢者相手のビジネスですね。健康体操教室のカーブス。あそこに高齢者の方たちが、筋力が落ちないために通う。じゃあ、頭のカーブスみたいなのを新井のような土地でやると、ビジネスになるのかやってみたいっていうことなんです。

映画を観るには、わざわざ映画館に出かけて行って暗い所で二時間も観るわけですよ。私には耐えられないんだけれど（笑）。家でゴロゴロしながら、途中で止めたりして観ていると、刺激は多分弱いんですね。でも映画館まで足を運んで観るというのが、頭にインパクトを与えるという。しかも隣では見ず知らずの人が見ているわけですからね。そうすると「さっきの〈ローマの休日〉で、なんかやっていましたよね」って、隣の人に話しかけてコミュニケーションがとれるんです。フェイスブックでもそうだけれど、共通の話題で人と繋がりたいのであれば、「人生フルーツ」（名古屋近郊の高蔵寺ニュータウンの一隅で、雑木林に囲まれ自給自足に近い生活を営む建築家の津端修一氏と妻の英子さんの日常を追ったドキュメンタリー・ナレーションは樹木希林）とか、高齢者の方が間違いなく来るなという映画をかけてやるとビジネスになるのかと。

―実験として。〈さん来夢あらい〉（妙高市新井の再開発事業による複合商業施設）ですね。

岸田　よくあそこまで人がいなくなりましたよね。しかし、行ってみて分かったんですが、新井の良い所は周りの集落が新井という一つの所に集まってくるということですね。

―新井の朝市を見て、物の豊富さや人の意識の奥深さのようなものがあって、新井は奥が深い土地だと思っていたんです。

岸田　ぐーっと集まってくる地形なんですよね。周辺は限界集落でも、限界集落からの道の一本一本があそこに繋がるわけです。そういう土地のエネルギーは何百年もあるわけですよ。新井のおばあちゃんたちは、黙々と新井の駅に向かって歩いて行くっていうイメージがありますね。

直江津は商業集積地だからいろいろ集まってくるけれど、縦にも横にも道があるから通過していくっていうまち。高田もやっぱり集まってきますけれど、商業が盛んになりすぎて商人が強くなった……（笑）。

―城下町がここまで一瞬にして、近代商業都市化した例ってあんまりないらしいですね。城下町ということで、ぐずぐずして結局取り残されて。今、そういう所が大観光地になっているわけですけれどね（笑）。高田は城下町だけではなく、世界館周辺に数多く残る洋風建物に見るような近代商業都市という捉え方での見せ方も本当はあっていいのではないかと思いますが。

岸田　ここはアクティブに商売をやっている人が多いから。分かりやすいのは商売で成功すると、もう少し間口の良いところに移っちゃうんですよ。同じ所でずっと商売していない。例えば直江津だと、同じ所に一〇〇年いて商売をするという感覚ですよね。

―なるほど。明治時代の様子を見ると、当初本町一丁目周辺にあった町工場が、南本町へ出ている例がかなりある。それは工場が手狭になって、出物の家があったからという。





上／わずかに残るモダンな近代洋風建築
下／「おもて屋」が入る高田小町

岸田　その辺が、高田とよく比較される村上と決定的に違うところですね。村上は商業規模が小さいから同じところに二〇〇年、三〇〇年とずっといるんです。そうすると土地に愛着もあるし、家には昔からのものが全部残っているわけです。この辺は突然、パッと別の場所に移って大きくして。大げさかもしれませんが、それまでのものを全部捨ててしまうという。これは不思議だなと思っています。

―「上越は否定の論理が働く土地」と言った人がいます。越後府中から福島城、高田城へと権力が移動するたびに、常に前の区画より大きいのを作って、関川をはさんで移動する。今の商業集積地が西から東、東から西へと移っているのとほぼ変わりないでしょうね。

岸田　かもしれないですね。ジャスコ（イオン）も移って行きましたしね（笑）。

―世界館周辺の町づくりは？

岸田　この辺はまだ高田の面白さが残っているところですよね。雁木があったり、道の裏側にいくと火防道路があって、そっちに行くと不思議な感覚がありますよね。そういうものが残っているので、〈高田〉といった時、見てもらうものとして最適なのが、ここから向こう側、東本町ですね。間違いなく今の商店街ではない。

もっと深く雁木が見たいっていう人は東本町の奥へ行けばいい。「もっと変なものが見たい」って言ったら、城下を出てしまいますが、四ケ所の方まで行ったらいいんだしね。

やはり高田の城を中心とした遺構ですね。この辺が（城下町の）入口なので入門編にはいいのかなって…。

―儀明川も川に向かってぐっと下がって行く、あの急傾斜が地形として面白いですよね。時季になるとアーチ型に水が落ちる水門もあるし…。

高田小町が上手くつながって来る可能性が強い。あわせて、リゾート列車の雪月花のお客さまも来る。

岸田　お客さんを連れてきてくれるので賑わいますね。JTBなどが、お客さんが来ると小町を見せて、説明して歩いていくので、ここに店があった方がいいねって、無理矢理お店を開いた。最終的には指定管理をとって映画館で運営したいなというのが目論見の一つ。

そうするとマンパワー的に楽になるんです。最終的にはお昼が出来るようなスペースにしていっちゃうとか、どんどんニーズに合わせていければいいなと。

少なくとも、ここ小町が開いていて人が張り付いているんだったら、それを利用すればいい。ここだけでは商売にはならないけれど、この事務所で世界館の仕事をしたって何の問題もないわけだから、ということは、店番をしながら小町の管理をしても問題がないわけです。

映画館があって、色々な意味で使い勝手を良くして行けるんじゃないかな。のっとる。（笑）

―この度、上越信金から三〇万円の寄付がありましたが。

岸田　ＤＣＰ（デジタルシネマパッケージ）という映写機を入れるのに寄付をいただいたんです。

昔、映画はフィルムで送られてきたんですが、今はハードディスクにデータを格納して届くんです。映画館で、それを読み取らせて上映が開始されます。事前にプログラムしておくと、上映時間になると自動的に始まるわけです。細かく言うと、室内の照明もなにもかも全て自動で動かすことができます。

―極端にいうと無人化できる？

岸田　今の映画館はみんなそうですね。一週間分、プログラミングすると全部それでやれます。ですからＤＣＰを入れておかないと、新しい映画に関しては完全に不利になっちゃうんです。今まではブルーレイで上映をしていたんですが、基本的に日本の映画界はブルーレイを作らないということになった。なぜかというとコピーガードを外して読み込まれてしまい、中国などで海賊版が出回るのを避けるためです。ＤＣＰのハードディスクは暗号化が厳しくて読み取られないので、東宝などでそれに切り替えました。





上越信用金庫職員から寄付を受け取る岸田さん。写真下のCDP購入費用に充てられた。

―値段は？

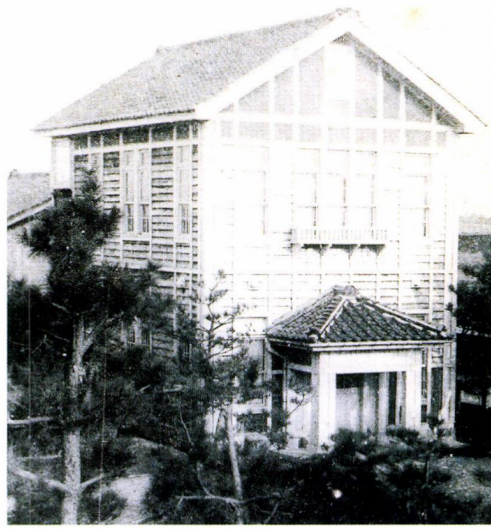
岸田　当初は一〇〇〇万円。今はどんどん値段が落ちてきて二〇〇万円弱ぐらいですが、電気や調光システムなど、もろもろ入れると四〇〇万円ぐらいかかっちゃう。そのため沢山の寄付を募りましたが、大口でいただいたのは信金さんが初めてです。

―長時間ありがとうございました。

＊岸田さんはこのまちを深く洞察し、どのように展開したら活かしていけるかという、明確なビジョンを持っている―と思っていたので、インタビューでは、あえてめぐらの話に終始した。氏のさりげない受け答えのなかから、「このまちのありよう」を発見していただければ幸いである。

インタビューの原稿を確認してもらった帰り、高田世界館の入口に貼ってある映画のポスターをしばし見上げてしまった。映画館に入り浸っていた昔が思い出された。

驚き、江戸時代生まれの座談会



新潟県立直江津農商学校「校友会報」の学校創立二〇周年記念号に掲載された座談会は、司会・オブザーバー四名を除く一二名が、天保から文久生まれという驚きの座談会である。

農商学校の「校友会報」の内容は、生徒による地域の産業に関する分析や歴史研究など多岐にわたり、ことに昭和一三年刊の「明治天皇北陸巡幸六〇周年特集」は、「直江津町史」にも引用されるなど、貴重な史資料を数多く残している。

転載にあたっては旧かな・漢字を改め、文意を損なわない限りにおいて文章を変えた部分もある。なお、基本的人権にかかわると思われる表現については、時代背景を考えてそのまま残している。ご了解いただきたい。

【本校主催　今町を語る座談会の記事】

昭和六年七月一八日午前一〇時より、本校において左記出席者を招いて、直江津付近を主題とした、今町の昔を語る座談会を開催した。その概要を期してみることにしよう。

出席者名（略・年齢順一覧表をご覧いただきたい）の十六氏で、上野校長座長席に着き、巧妙に席上を整理したので珍談百出、直江津信用組合理事片田九十八氏を「オッチャン」扱いにするなど、和気藹々裡に風俗、災害の思い出を語り、自余の座談に対してはいずれ日を改めて再び会合することとし、郷土館を視察し、記念撮影を為し、午後四時散会した。

■祇　園

上野　ちょうど祇園も終えましたので、祇園のお話から聞きますが、御輿が高田から直江津へ川を流れてくるようになったのは、いつごろからでしょうか？

一同　それはずっと以前からでした。



直江津農商学校　右上の写真は郷土館
（農商学校創立 20 周年記念絵はがき）

川合　慶長一九年、松平忠輝が高田へ（城を）移転してからである。記録によると、米六石を寄付したとあるが、今から三百年も前かと思う。

伊藤　祖父の話によると、いつ頃か、またどこから来たのか、八幡様のお札が私の家の庭に落ちていた。それを今の岩片（八坂神社）の場所へ祠を建てて納めました。

川合　現在は八坂、諏訪、日吉の三柱神社と称し、八坂神社は今の宮の所で、日吉神社は今の砂山の所あるのを持ってきた。諏訪神社は女子部（現・直江津南小学校の位置）にあったという説と、海岸の諏訪区にあったという説があり、郷社になったのは元禄年間（昭和三年に郷社に列し八坂神社と称号している。何かの間違いか）である。

伊藤　分家の甚四郎の話では、当時の直江津は一体に野原であったそうで、現在、砂山の泉蔵院の側に私どもの住居があったもので、ほかに三家あって通称「四屋」と称していたそうです。

上野　昔の祇園の賑わいはいかがでしたか。唄とか囃子などは？

伊藤　今よりずっと賑やかでした。町々で（山車を）一つ





神鶏（諫鼓鶏）
上 五智の祭り（白山神社例祭）の山車
下 春日神社春の例祭の山車
直江津の祇園祭にもこのような山車が出されていたのだろうか

出　席　者　名

生　年	名　前	住　所	現表記	年齢	
				明治1年	昭和6年
天保 12 年（1841）	藤田勘蔵	有田村	春日新田	27	90
天保 14 年（1843）	羽子田三次郎	塩屋区	塩浜町	25	88
同	竹内與五平	有田村	三ツ屋	25	88
弘化 4 年（1847）	水島喜平	中島区	天王町	21	84
嘉永 2 年（1849）	横山萬作	大濱村	西福島	19	82
嘉永 4 年（1851）	古川チヨ	片原町	天王町	17	80
同	幸村三吉	寄　町	住吉町	17	80
安政 1 年（1854）	鈴木タキ	諏訪区	—	14	77
安政 2 年（1855）	金澤タイ	諏訪区	—	13	76
安政 3 年（1856）	伊藤サツ	寄　区	住吉町	12	75
安政 4 年（1857）	柴山平三郎	横　区	横町	11	74
文久 3 年（1863）	土井ソト	新坂井区	福永町	5	68
同	市村吉蔵	新　区	本町	5	68

司会・オブザーバー　片田九十八（こと や）　号・三声　当時 直江津信用組合専務理事
川合直次　号・吟風　当時 高田市長
林　圭助　当時 直江津町長
上野周吾　第３代新潟県立直江津農商学校長

づつ出した。寄町（住吉町）は鈴、つまり千成瓢箪でした。

柴田　横町は美麗な旗でした。川端町（荒川町の一部）は太鼓に鳥（鶏＝前ページ写真）、中島・片原町（天王町）は旗に鉾などもあったと思う。

市村　それはよほど大きな町でなければ出ませんでした。町々では印半纏を着て出たものでしたが、その時の山車や衣装はその後の火事でみな焼けてしまいました。

片田　砂山方面には無かった。出す資力はなかったのですね。

上野　お迎え船が寄町、出村と代わる代わる出るようになったのはいつ頃ですか。

伊藤　維新前は寄町がやっており、維新後は出村がやりましたが、水上げの出入（訴訟）をして、ついに寄町が勝っていたが、維新ころだと思うが、とうとう東京まで出て争い、仲裁するものがあって、その後、寄町と出村が代わる代わるやるようになった。

林　お出迎えの模様はどんな具合でしたか。

伊藤　御輿をお乗せするのは川船で、川船二隻と伝馬船三隻とでお迎えしました。有田村門前あたりで（関川大橋あたりか）綱を投げて双方で曳くのでしたが、それは盛んなものでした。

上野　今の御輿は昔のものそのままですか。

川合　今の小さい方の御輿（諏訪・日吉社の例祭に出される）は前からあったものです。（祇園祭の御輿を）こしらうについて、一切の費用は高田で出したので、所有権は高田にあったものです。

片田　一体、祇園祭は高田藩主の高田繁栄のために企てた一つの政策であったとのことである。それは全町挙がってある期間休業してお祭りをなし、それと同時に近在の人を集めて散財させる一つの方便であったのです。そこで、高田には陀羅尼（八幡）、直江（八幡）、関町（神明）という具合で、似たか寄ったかのお宮さんばかりで、どれを主にしてお祭りをやったらよいか取捨に困った挙句、直江津の八坂様が城の鬼門に当たるとか言って、城の祓いをしてもらうという名目で直江津より引き寄せることになったものである。

川合　今の御輿を造る時は、直江津の方では全然所有権が無いということは面白くないというので、高田へ頼んで高田七分、直江津三分という具合に出資（出資比率には諸説ある）して造ったものである。その後、修繕もそのようにやっている。

上野　水上げはどんな具合であったのでしょうか。

片田　元禄時代であったが、当時、住吉神社の所に天王川があって、そこへ上げ、すぐ宮（八坂神社）へ運んで、祭りは一日であった。

川合　天王川は諏訪区と新川端（両区とも河港分離と関川改修で消滅）の間を流れていて、いまよりずっと（川幅が）大きかった。

林　今までに、天王川は三度切り替えになったようですね。

片田　維新後は祇園と七夕が一緒になってしまいました。祇園が賑やかになったのは、七夕を廃して一緒にしたからである（明治三三年刊の「直江津繁盛記」にも同様の記述がある）。

■塩垂唄

上野　学校の教科書にもあるが「塩たれ唄」というのはどんな唄ですか。

一同　さあ、私どもにもよくわかりませんわ。

川合　「越後土産」（紀興之編・元治一年＝一八六四）に一つ二つある。

片田　今の佐渡おけさのような唄でしょう。

松矢　文句は今の佐渡おけさのように「佐渡へ佐渡へと草木もなびく……」というようなものでしょうか。

川合　その唄は塩を造る時に唄った唄で、塩は塩屋新田（塩浜町）で造ったもので、今から三百年ほど前、能登（能登島）から〈塩造り〉が（今の）塩屋新田へ移住して来たのです。同じく「佐渡は四十九里」というのもあるが、あれは能登からの里程でしょう。

■盆　踊

上野　皆様の小さい時分の盆踊りは。

伊藤　直江津は「米だいしょう」（米大舟）で、高田は「潮来」でした。

藤田　有田村、大濱村は「やしゃごしゃ」（八社五社）でした。

伊藤　踊りは男衆の囃子が中央に三人笛吹いて、そのまわりを男も女も跳ねるように踊るのですが、それは盛んなものでした。片田の角から福永の門（両家とも新町通り）まで輪を作った。その時はお膳籠やお椀籠をかぶって踊りました。

川合　そして比較的良家の子女が多く出ましたね。

伊藤　そうです。とにかく一三日から二二日ころまで踊りぬいたものです。私が踊るから誰か唄ってください。

（竹内・幸村唄い、伊藤踊る）

田舎なれども　金谷の薬師
　花の高田は　目の下だ
妻を欲しくば　八わた（八幡）へござれ
　八わた八幡　妻の神

■住

上野　昔の家の造り方は、今の家とはちょっと違うようですが、いかがでしょう。いま、どこかに昔風の家はあるでしょうか。

一同　さあ、わかりませんね。大方は再三の火事で焼けてしまいましたからね。

上野　屋根に石を乗せるのは、早くらあったのでしょうか。

柴山　それははやくからありましたね。私どもの時分から、皆そうでした。

上野　建前や土台突きのありさまはいかがでしたか。

市村　今とあまり変わりませんね。

上野　そのときの唄は、どんな唄を唄いましたか。

市村　やはり同じことでしょう。

上野　時計はいつごろから

市村　明治維新後まもなくです。形は六角で、四つとか五つとかを打った。振子はフンドン（分銅）式で、機械はみんな見えていた。

■衣

上野　昔の着物はどうでしょう。足袋などありましたか。

伊藤　足袋はなかった。あってもめったに履かなかった。むやみに履いたら叱られたものです。

上野　御高僧頭巾という、この辺だけのものでしょうか。

船木　そうでないようです。昔は覆面帽子といって、嫁に行くときに被ったものです。

上野　「越後の綿帽子」といって、これだけは他の地方にはないでしょう。

市村　あまり聞きませんね。いつ頃からはやったのか知りませんが、越後特有ですね。



上野　「一度二度まで妻折笠」という唄があるが、どんなものですか。

一同　妻折笠とは庵主さんや瞽女さんのかぶっている笠で、三度笠は饅頭笠のことである。（笠の名称には諸説ある）。

■風　呂

上野　当時の風呂はどうでしたか。

柴山　風呂屋はみな、莚を掛けてあった。それをくぐって入ったのです。とにかく風呂屋の莚は独特でした。

■遊　興

上野　加島屋はいつ頃から料理屋を始めましたか。

土井　六〇年くらい前です。

川合　その頃、一杯飲むのにいくらくらいいりましたか。

土井　二〇銭、三〇銭くらいでしたね。五〇銭という宴会は三日も前から用意しなければなりませんでした。

柴山　明治二二年頃、議員制度が出来て、私が第一回の町会議員に当選して、その祝賀会を開こうとして、会費が五〇銭だったので、我々貧乏人は困る、二〇銭位が至当だと反対をした。その時、町長は石井（彌九郎）さんで、この人の仲裁で、結局三五銭で折り合うことになりました。

川合　宿賃はいくらくらいでしたか。

柴山　だいたい一二、三銭でした。

上野　遊郭はどの辺でしたか。そのうちの主なる妓楼の名は。

一同　丸惣・杉田屋・三国屋・金谷・蝋燭屋・ささ屋・樋口屋・みみずや（みすずや？）等である。

川合　中島と出村（諏訪区）にあって、中島の方が格が上であった。船付場であったからなかなか繁盛なもので、みんな源氏名を用いていた。高田は直江津よりずっと格が低くて、そこの女郎を飯盛と称していたが、廃止になったのは御維新になったからである。

伊藤　その時（廃止）は、前借があっても、みんな棒引きにされたものだ。中島には二七軒ありました。



上・右上 加島屋発行の絵はがき
上の写真は「ヤラシャレおどり」
江戸時代の旅日記にも記録されている

上野　出村の方は何件あったでしょう。

片田　出村は二〇軒まではなかったでしょう。下新町（新橋区＝新区）はずっと遅かった。

伊藤　藍玉の衆が来た時分は、実に賑やかであった。遊郭は一軒残らず提灯を点けて、総上げとヤラシャレと踊ったものだ。

川合　藍玉の衆とは、阿波の国の藍玉商人のことである。今の住吉神社は藍玉の衆が持ってきたものであると言われている。

■郵　便（飛脚）

上野　年始状のごときもののやり取りは一般にあったでしょうか。

伊藤　江戸まで二〇日もかかってやっと届くような状態でした。

柴山　兄が江戸で死んだが、ある時、みんな夢見が悪いので、変事がなければよいがと思って心配していたら、それからしばらく経ってから黒井の飛脚が遺骨を持ってきてくれた。が、それは死んでからちょうど四〇日目かであった。

市村　大阪方面は多く船で運んだ。飛脚の配達ぶりは黙って投込んで行くだけで、今のように声を掛けたり、受け取りを取らなかった。

伊藤　この地方は、みな高田の春日町の與次郎さへ頼みに行った。

市村　糸魚川の寺島至という人は、非常に足が速く、一日に二〇里も歩いたもんでした。

川合　その人は、後で衆議院議員の選挙の時に立候補して落選したが、ほとんど自分の脚力が武器で、町から村を一日中歩き通しに遊説して歩かれたということです。県会議員や評議員にもなられ、直江津の護岸工事には非常に努力された人です。

注・慶応四年四月、幕府歩兵隊長古屋作左衛門は浪士を率いて会津を巡り、信州鎮撫と称して高田城下から富倉峠を越えて飯山へ向かう途中、直江津の林正寺に休息したと言われている。

「水戸浪人の狼藉」と次の「會津戦争」における会津藩士の傍若無人ぶりについて、「直江津町史」は古屋隊が引き起こした同一の事件として、古老の談話を載せている。なぜ項目が分けられたか、何か別の事件があったのかは不明である。

古屋隊の騒動の後、直江津は官軍の兵站基地となり、海陸輸送人員の徴発、軍隊の宿所や負傷兵の救護所として、町をあげて当たったため非常な困窮に陥ったという。

なお、「敗者の維新史」（星亮一）および「会津藩士の越後流亡日誌」（阿達義雄）に、高田寺町に預けられていた〈会津降人〉が許され、明治三年六月七日高田を立ち、今町で昼食した二八二人が今町湊から斗南に向かう本船の待つ新潟へ出航したと記されているが、彼らが狼藉を働いた事実は聞いていない。

■水戸浪人の騒動

川合　柴山さん、水戸の浪人が来た時分はどうでした。

柴山　一番恐ろしかったのは水戸の浪人の暴行の時でした。柴田屋・高田屋・みなとや（宿所か）等でした。原因は今の柴田屋の横の井戸へ水戸浪人が小便をしたというので、気丈な私の父は怒ってそれを咎めたところ、浪人は不埒である、殺してしまわなければならぬと太刀を

抜いて騒ぎ立てた。私の家は当時蕎麦屋で、一〇何歳かの私は、親類の者に連れられて（逃げ）、（浪人は）松下・大鳥さ（両者とも目明し）に追いまくられたものです。

伊藤　そして、住吉の下へあがって水を一杯くれというので、やったこともありましたが、とうとう松下・大鳥に捕まって、竹槍で二度も横腹を刺されて殺されてしまいました。そして、悪いことをする奴はみんなこんな目に遭うんだというて、わざわざ私共にその凄い様を見せつけたものです。その時分の目明しは松下と松下の手下の勘蔵との二人きりでした。

柴山　今のそれと会津戦争の時は一番恐ろしかった。

■會津戦争

上野　幸いそれを聞こうと思っていたのですが、その時分の話を聞かせてください。

伊藤　会津戦争はまったくすごかったね。会津藩の者は町中一杯で煮えかえるような騒ぎであった。その時、私はお茶の給仕をしましたが、飲んでしまうと茶碗を地べたにたたきつけて、わざと壊してしまう。その気荒なことは思い出してもゾッとする位です。いつ殺されるか、生きた心地はなかったもんです。



観音寺の戊辰戦争戦病死者の墓
小浜藩士中山正路と従者伊助の墓
光明寺にも同藩山田盛房の墓がある

川合　それから仁和寺宮（後の小松宮）が暴風の中を船から直江津へお上がりになった時（慶応四年七月九日）は、初めてこの辺の人は「錦の御旗」を拝したということです。その時のお話を承りたい。

柴山　なかなか威勢の良かったものです。日輪・月輪の旗を先頭にして威風堂々と乗り込み、顔をあげれば恐れ多くて、目がつぶれるというので、土下座のままひれ伏していたが、上下ベタ金の御盛装を見ただけでした。とにかく恐れ多くてただ頭をさげただけで宮様のお顔を拝されなかった。

■火　事

上野　今度は火事の話をお願い致します。

古川　私どもはいつもまる焼けでした。

片田　だぼ八火事（天保一五年三月二〇日、当時の戸数一三二二戸のところ一二〇三戸消失）を知っていますか。ずいぶんひどかったようで、畳など古城や春日新田あたりまで飛んだということです。

一同　ずいぶん古い話だからよくわかりません。

柴山　だぼ八火事だか地震火事だか、なか一日置いて二度火事があったそうですが、直江津全町消失したと聞い

ている。

上野　地震火事というのは。

竹内　地震火事は六月の何日頃（弘化四年三月二四日発生）であったか、佐内の方は二五軒あったが、急にグラグラと横倒しにされたかと思ったら、すぐにまた反対の方へ覆されたが、振動はずいぶんひどかった。

川合　それは善光寺地震の余波で、直江津も新町の川合平六（今の宮崎＝現・わくい）と小林百哺（柿村書店）の家が鉢合わせになったと伝えられている。当時の柿村の小路は二間（三・六m）位もあったろうが、とにかくひどい地震であったらしい。

柴山　その時に島の市という按摩さんは、地震でできた穴に落ち込んで、サア大変だと思っているうちにまた、もとの通り上げられたとかである（液状化現象があったという）。

川合　地震火事は弘化四年で、今から八四年前だと思う。※三月二九日夜半、新川端町から出火、九五七戸焼失。真行寺過去帳に、一日置いて再燃して被災者の仮小屋も焼失するなど、町は灰燼に帰し、この火事を地震火事と呼ようになった。天保一五年（弘化元年）から三度の大火に見舞われ、町は疲弊の極みに達したとある。（「直江津町史」）

上野　その次の火事はいつでしたか。

川合　明治四年の木沢の火事だ。

柴山　新町から寄町・中島・本砂山の一帯を焼いた。焼失戸数七百戸位だという。

川合　料理屋のたつみやと木沢材木店が火元争をした。

柴山　女郎が証人となって、木沢の方から出たと頑張ったが、とうとう原因不明となった。

川合　その次は明治一五年の桑原火事だね。今の桑原と山田さんの蔵の間から発火したもので。どちらかといえば山田さんの蔵の方が先に燃え出したらしい。原因は久太郎という盗賊が放火したもので、桑原火事など名前を付けられたのは桑原さんにとっては至って迷惑な話さ。

市村　その火事は新川端・諏訪区にかけて三百戸近く焼いた。

川合　私の家は当時、今の中央電気の出張所の所（三八市通り）にあって、土蔵造りであったので、火事は私の隣まで来たが私の家で止まった。新築して間もなくであったが、その土蔵と掘り抜き井戸のために危うく助かった。当時、直江津には掘り抜き井戸は私の家以外には一本もなかった。つまり私の家のは元祖であったわけです。

上野　その次の火事は何時ですか。

川合　明治三一年の砂山火事（八幡火事）で、一千戸以上焼けました。

羽子田　だぼ八火事の次はお常火事のようだ。

一同　それは元治年間で、いまから六、七〇年前だ。誰かのお囲い者が出した火事で何軒も燃えなかったらしい。

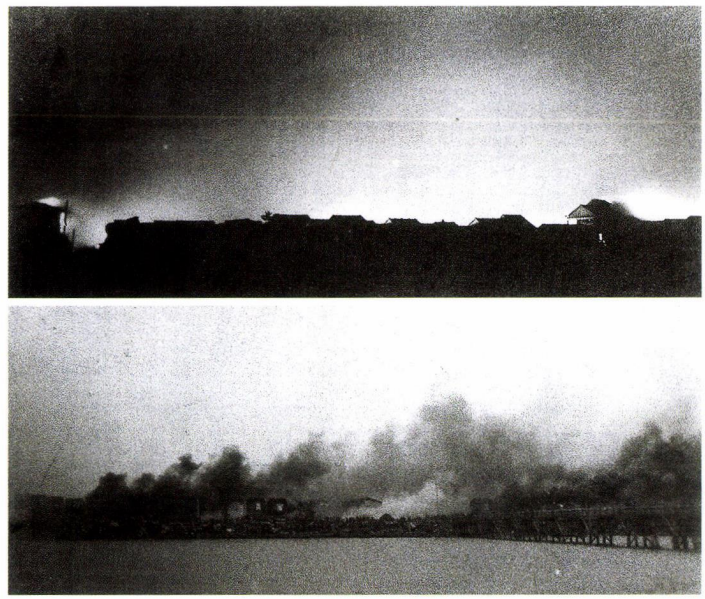
※慶応一年（元治二年四月改元）四月出火、三一四戸焼失。（直江津町史）

川合　その次は丸惣火事で、（明治三一年に）続いて三二年にあった（実際は三三年）。

柴山　次は三三年の銀行火事だ（実際は三四年）。

川合　柏崎銀行（新川端町）から出たもので、五〇軒位焼けた。原因はいまだに不明だが、支店長夫婦と子供三人の死体が焼け跡から出た。たぶん強盗に殺されたうえ放火されたものでしょう。

柴山　次は三五、六年（実際は三九年）、今の曙区の西山



通称「ながさ火事」
上 明治３９年７月１１日午前１時３０分
下 午前４時１０分
上の写真の黒煙をあげている高い建物は高助の倉庫、下の橋は永代橋（写真 / 高助合名会社所蔵）

呉服店の裏手筋の何とかいう役場吏員の家から出たもので一五、六軒燃えた。

上野　その次は。

柴山　三九年のながさ火事で、今の北校舎（現・直江津小学校）前手、寄町から発火し、直江津の大半一千戸以上が焼失した。

一同　その次は四〇年のしんきや火事で、中町（天王町）からでた。そして片原町まで約四〇軒（一三六戸焼失）を焼いた。

柴山　次は精米所火事で旭区の麓医院の向かい筋から出火した。

市村　七百軒焼いたろう（五八二戸焼失）。

一同　その後も二、三軒位の火事は数回あったが、いずれも大事無く収まってよかった。

上野　それらの火事における風向き及び季節はいかがな具合ですか。

一同　風は何時も強烈な南風の日に多いが、季節はいろいろですね……。桑原火事は二月で、銀行火事は三月三一日（実際は三月四日）でした。三一年の砂山火事（八幡火事）は七月でした。地震火事は一日置いて焼けがらから発火し、二度焼けたということです。何しろ地震の振動は六〇日も続いていたんですからね、たまりません。

片田　藩政時代の直江津大火の際、川合・福永・井田・片田の四家から四百両出して罹災者を救恤したが、藩の許可を受けなかった廉（かど）で叱られたそうである。

　また、類焼の憂いがあるので、お城米を今の新橋区（荒川橋畔）から旭区の今の大塚倉庫（住吉神社近辺）辺りへ運搬したとき、それを無許可とあって大きなお叱りを受けた。その次にあった時は、またそんな目にあっては馬鹿らしいと誰もかまい手がなく、とうとう焼いてしまった。今度はなぜ危険を知らせなかったかと言って、あべこべに叱られた。とにかく、玄米に付いた火は何日も燃えていて、なかなか消えなかったそうである。

■水　害

上野　火事のお話をお聞きしましたから、こんど水害のお話をお願いいたします。

柴山　一番ひどかったのは、（明治）三〇年の、つまり大火の前年の水害で、安国寺（西本町）・轟木（栄町）はもちろん、横町・新町・寄町・新川端町など、町の東方大半と古城（港町）全部を浸水せしめ、町役場は横町の龍泉寺へ避難し、炊き出しはそこから船で運んだものです。

横山　その時、私の方（西福島）も一面に浸水したが、

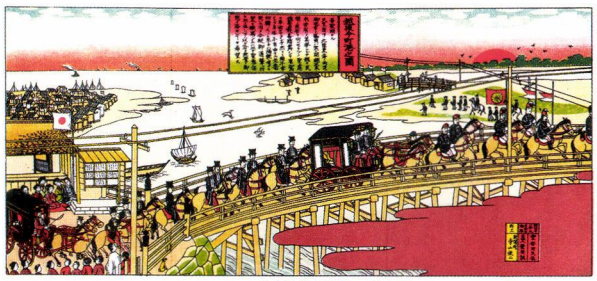
保倉川の水が鉄道につかえて刻々水量を増し、家屋まで流さるる様になったので、村中して鉄橋を破壊したら、頭領の関根干城のために三六人が引っ張られたが、私もその中の一人で、中には一軒の家から三人も罪人として挙げられた者があった。新潟で裁判を受けて無罪となったが、検事の控訴でまたも東京へ引き出され、ちょうど一年間、牢へ投げ込まれた。

林　三一年にもあって私どもは味噌桶や車を流しました。

※明治三〇年七月一三日、豪雨により保倉川が増水し、北越鉄道（現信越線）の線路敷が排水を妨げたため、当時の南川村長関根干城は、住民を指揮して線路敷（鉄橋）を破壊、村を水没から守った。しかし鉄道を破壊したとして捕えられた。

■橋

上野　当時の橋はどういう順序で架かっていましたか。





上　御巡幸の錦絵（「直江津町史」折り込み）
右　直江津郵便局の中庭に建てられた記念の標柱
（直江津農商学校「校友会報」）

一同　昔は渡し舟で、上の方と下の方に一つづつあった。橋の架かったのは明治七年頃（明治五年）で住吉神社の所から架かった。しかし往復でそのたびに賃金（銭取橋）を取られた（明治三五年に現在地付近に架橋）。次に永代橋で二〇年頃架設された。上の直江津橋は三二年頃架けられた。

■明治天皇御巡幸

上野　明治一一年の明治大帝の北陸御巡幸の時の御様子を聞かせてください。

林　それは柴山さんにお聞きすれば一番よくわかる。先年、宮内省から北陸御巡幸の祭、直江津で奏楽を御聴聞に達したと記録にあるが、当時の模様を知らせてもらいたいと言ってきた。柴山さんはその時の楽人の一人です。

柴山　御巡幸は九月であった。最初、お立寄りのことが分からぬが、関川までおいでの時、私どもで作った雅楽倶楽部の者が、御旅情を御慰め申すため、御前で奏楽の許可を願い出たが、いろいろな手続きを要するので、柏崎で御許可になったが、新潟までお出でにならねばならぬので、二五日、御還御の際に直江津で御聴聞に達しました。その日はひどい雨で、行在所（小休所）は福永様であった。私共は臨時判任官の資格を賜り、新調の木綿の白衣にカンレーシャ（寒冷紗）の水干という装いで、福永の玄関に畏まっていた。やがて御発輦という時に玄関から雅楽〈抜頭〉を奏し、わずかの間、御聴聞に達しました。

その時の役割は、横笛は時計屋の松下喜三郎、鈴木吉四郎、篳篥は私に金井庄吉、樋口平蔵、笙は横山嘉三郎に大和（奈良県）の龍田神社の伶人（楽人）竹内照方、太鼓は白川勝之、琴は門間哲雄の九人で、終わってから

酒肴料として金五円の御下賜がありました。

片田　御駐輦所（ごちゅうれんしょ）を後で拝見しましたが、盥（半切り）に大きな魚を泳がしてあったのを覚えています。

※昭和一三年刊「校友会報」（直江津農商学校）の柴山談によれば、柴山は当時二一歳。雅楽は居多神社が県社に昇格したとき、府中八幡渡邊巌宮司に「祝賀の雅楽を奉納したらどうか」と勧められて習い、以後、春秋の例祭に奉納したのもだという。臨時判任官になったのは、土砂降りの雨に濡れているのを天皇が哀れみ、臨時に任官して玄関わきの間に入ることを許されたのだという。

　龍田神社の楽人竹内照方は、明治八年頃、光明寺で行われた蓮糸の曼荼羅（當麻曼荼羅）の出開帳に同行した雅楽団の一人で、乞われて三年ほど直江津に滞在して雅楽を指導した。

■盛り場

上野　直江津で一番繁華な町はどこでしたか。

一同　新町でしたか。川端町もこれに劣らなかった。



賑わう新町通り
大正天皇御即位祝賀の飾りつけ
大正４年 11 月 10 日





春日新田の馬市　時代は不明
覚真寺村道にある忠太夫の墓
歴史の道しるべの碑が立っている

片田　新町は小売業が多かった。川端町は問屋業の人ばかりでなかなか賑やかでして。

■馬　市

上野　春日新田の馬市はいつ頃からでした。

高橋　宝暦年間で、今より三百年前のことだ。

川合　もとは春日山城下にあったものであったが、それを堀家になってから古城の福島城へ移転したとき現在の地へ移したもので、その後、一旦中絶したこともある。

※春日新田は秋田佐竹藩の預かり地で、宝暦一四年、地元の馬喰又左衛門が佐竹氏の許可を得て秋田馬数十頭を売ったことが始まりと言われている。昭和一八年頃まで続いた。又左衛門は高浪忠太夫と名乗り帯刀が許された。春日新田の覚真寺参道に忠太夫の墓と史跡の碑が立っている。

上野　そうですか。長い間いろいろとありがとうございました。いまだに多くお聞きしたいこともありますが、あまり遅くなりますので今日はこれで閉会にいたします。

（構成・注書き　佐藤和夫）

頸城の空間を駆ける　国府―春日山―府中―直江津へ　①

川と用水

～高田平野を穀倉地帯とした主役たち～

小島幸雄

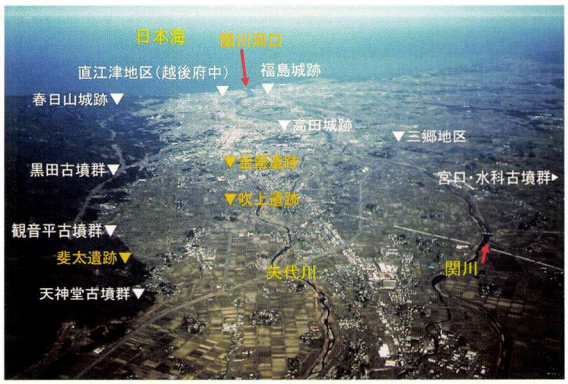
今号から頸城平野全体を俯瞰する新シリーズを開始しました。筆者は引き続き小島幸雄上越市専門学芸員にお願いしました。

◆はじめに

今回から越後府中という枠を超え、頸城という地域を考えていくこととなった。もともと上越市のことを考えると、東西南北から陸路に加えて海路でも文化が入り込んでいた土地であり、それほどエリアとしての違和感はない。たとえば、昭和四〇年代に縄文土器の地域性を考えた論文では、関川を越えて影響力を持った土器群と、越えることがなかった土器群のあることがすでに指摘されている。現代のわれわれには関川を境に使われている道具が違うなど考えにくいが、四千年も前の縄文人にとっては文化を分けるほどの影響力を持った河川であったのだ。

昭和五二年四月一日、筆者は上越市に採用されて初めて、上越という地域を考古学という目で見ることになった。その印象は「遺跡が極めて少ない！」というものであった。それは二年数ヶ月で打ち消されるのだが、越後国府のまちとされているにもかかわらず「何で？」というのがまず疑問であった。遺跡が少ないという現象が作られた理由は単純ではないが、「自然の作用と人間の活動」があいまって、遺跡という人間活動の証が打ち消されていったことが分かってきた。

結論から先に示すと、「高田平野の穀倉地帯としての土地利用が遺跡を隠していった」と考えられるのだ。この地に暮らしてきた人々の生活痕跡を、次世代の人間たちがかき消していったのだ。それが耕地整理というものであった。「よりよい水田を作りたい」これは稲作を生業とする人にとっては当然の行為である。それが前代の人たちの活動痕跡を見えなくしたと考えられるのだ。





上　高田平野の真ん中を走る関川
下　ライオン像の建物をまちづくりに活かす会主催の天王川クリーンナップ大作戦



矢代川を越えた稲荷中江用水のサイホン



江向遺跡出土の銅印
「高有私印」と読める（上越市指定文化財）



四ツ屋遺跡出土の織部柳図徳利
（上越市指定文化財）



関川頭首工

ところが、美田作りを繰り返した結果、現代の耕地整理が過去の解明の糸口となっているのだ。今回は高田平野で稲作が行われるようになって二千数百年が経過しているが、その間の経緯を踏まえて平野の土地利用を考えてみた。

◆天王川フォーラム

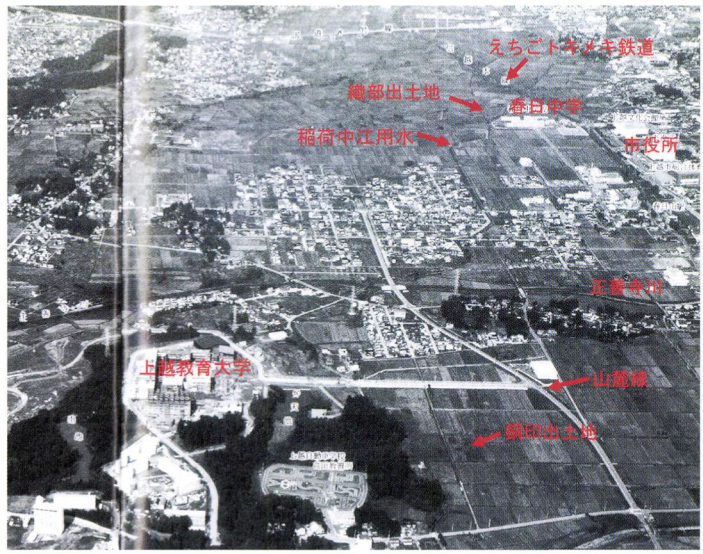
今年の二月二五日、天王川フォーラム（ライオン像の建物をまちづくりに活かす会主催）が直江津学びの交流館で開催された。その打合せが行われた日、磯田氏の口から鉄道のところにあった川が「いなり」と呼ばれていたという発言があった。「いなり」は稲荷中江用水であろうことは容易に推測がついた。昨年の秋、和田地区の歴史を記録に残そうと活動する会から、和田の土地を俯瞰して寄稿するように依頼されていた原稿を提出した後であり、稲荷中江用水に少しばかり因縁を覚えていた。

稲荷中江用水の名は筆者にとってとても思い出深いものだ。上越市に採用になっての初仕事が、上越教育大学の敷地内にあった遺跡の調査で、現地にはじめて赴いたときに見た用水が稲荷中江なのだ。そのころは単に用水の一つとして認識したに過ぎなかったが、その後、用水の近くで発掘調査するたびに、用水の流れが地下に存在する隠れた地形を知る手がかりであることに気づかされていた。最近の耕地整理は大型機械を駆使して土地の改変を伴うので、施工後に施工前の土地の起伏まで推測することは不可能だが、鍬やスコップで土を掘り起こして一輪車で運んでいたような耕地整理では土地が大きく変わることはなく、まして稲荷中江用水は丘陵の縁を縫うように敷設されたものなので、隠れた地形を知るにはもってこいのものであった。

ところで、ここで稲荷中江用水の全容をお話しておこう。用水は高田平野の西側を上越市の南から北へ貫流している。取水されているのは関川と大熊川の合流地点の北側で、そこから一度西に流して上越大通り、そして鉄道さらには矢代川をサイホンで潜って地上に顔を出す。そこから上越妙高駅の東に回りこみながら再び北に流れ、西に向きを変えて丘陵に向かい等高線にそって流れていく。そして、なんと直江津まで到達して天王川と名を変えて関川に戻っていた。

◆隠れていた地形

平成四年、大学前で区画整理が行われた。そのころ水田の地下から遺跡が確認され始めていたので、遺跡が埋蔵されていないか調査を行った。その結果、かつての表土や耕作土は削り取られて失われていたが、粘土ばかりだと思っていた水



宅地造成が進む春日地区（「空から見た私たちのまち上越」より）

田の地下に、昭和五二年に調査を行った山屋敷遺跡と同じ平山段丘が眠っていることが確認された。田んぼの下に赤土が眠っていたのだ。

右の写真は上越教育大学上空から春日地区を望んだもので、稲荷中江用水と書かれた上方が水田のままである。それまで山すそを流れていた用水が東に流れているのは、微高地を避けているからである。水は高いところから低いところへ流れる、当たり前のことだが用水を平野に沿って長く利用するには等高線を見極めて地形に合わせて開削しなければ意味がない。われわれの先人は測量機械がない時代に、よくもこのような微地形を見極めて用水を敷設したものと感心する。

では、水田の下の段丘に生活した人はどんな時代のどんな人たちだったか考えてみよう。

発掘された遺跡は一〇世紀頃、平安時代の掘っ立て柱建物である。建物の規模は二間七間（六㍍×一七・四㍍）という高田平野では最大規模の建物であった。そして、何よりも印鑑を所持していたことが出土品から判明したのだ。印鑑は、現代人にとって見れば日常品でいつでも所持し、文書や金融機関での金銭の授受に広く使用されている。何で印鑑がと思われる方も少なくなかろう。しかし、平安時代に印鑑を使用したのは極めて限られ、そのほとんどは役所か寺社であった。ところが、今回紹介するのは「私」と刻まれた印鑑であった。公的機関ではなく、私人を示すための印鑑が出土したのだ。

印鑑のことを事細かに解説する場ではないのでこれくらいにするが、実はこの印鑑に記された文字を名にもつ人物はこれまで越後古代史には登場しない。謎多き印章であることには間違いない。

なお、大学用地内に山畑遺跡が調査されている。七世紀前半頃とされる遺跡は高台に営まれた竪穴住居の遺跡だ。その二百年ほど後に印鑑を所持した人物がこの地に現れたのだ。そして私人として印鑑を所持していた。上越の古代はとても興味深くそしてなぞが深い。そんなことを教えてくれた用水の曲線であった。

◆用水や川に挟まれた微高地と遺跡

同じ稲荷中江用水から地形を紐解いてみよう。

昭和五〇年代後半、春日地区で大規模な区画整理が計画されていた。信越線から大豆までの間を住宅地として整備するものであった。その頃はこの地区の水田は耕地整理されていなかったので古い景観を良く残していた。

用水も直線的でなく等高線に沿って流れていたので、微地形が良く分かった、というより江戸時代に敷設された用水は、戦国時代以前の町割などによって規制されていることが判明したのだ。

再び写真をご覧いただこう。用水が微地形を避けることを書いたが、稲荷中江用水が織部出土地と書いた地点を避けているのは、地形ではなく人工物も避けていたのであった。区





上　大和神社の区画の左にＬ字状の堀が見られる
下　大和神社に残る中世の館の土塁

画整理の際に発掘調査が行われた四ッ屋遺跡のあるところで用水が曲がっているのであって、これは自然の地形の等高線に沿っているのではなく、水田地帯に残った畑を迂回するためにわざわざ曲げられたのである。曲げられた用水に囲まれた中にあった遺跡は平安時代と安土桃山時代のもので、美麗な織部の徳利が出土した。筆者の五〇年を越える発掘歴で、最もお気に入りの出土品の一つである。

話を元に戻そう。用水の北に目を転ずると御館川が描かれる。御館川も四ッ屋に流れ込むことなく北に向きを変えて流れている。これも館を意識したものである可能性が高いが、用水と違って川は自然発生したものであり、平安時代に四ッ屋に住んだ人は、御館川によって形成された自然堤防を選んだと考えたほうがよさそうである。

◆今泉城と稲荷中江用水

稲荷中江用水を見ると、もう一箇所特徴的な屈折を見ることができる。和田地区大和二丁目の大和神社の東側から北側にかけてである。ほぼ直角に曲がる最初の屈折は、大和神社境内とその周辺に推定される今泉城の堀跡と推測されている。土塁がないのは崩した土をならして用水を補強したためと考えられ、堀の幅は今の用水よりも広かったであろう。

更正図から館を推定復元することは、以前から試みられてきた。「上越市史叢書8―中・近世資料―」に収められている金子拓男氏の越後府中を対象に行った、「府中地内遺跡所在図」が好例である。これによって越後府中の館の位置が想定され、われわれもその恩恵にあずかっているのだ。市街化が進み発掘調査という手法を用いなくても、想定の範囲を出ないとはいえ町の復元を可能にする方法として妥当である。

ところで、今回の作業に際して越後府中の範囲で稲荷中江用水の復元を試みた。あくまでも地図情報と更正図の集成から行ったもので、開削の時期や流路変更の時期まで想定できるものではないが、御館川まで南西から北東方向に流れてきた用水が西に流れを変え、さらに北に向かって進んで府中八幡社に向かっているように判断された。最後に北へと流れを変えるのは、御館跡と安国寺跡の間に用水を開削したことによるものではなかろうか。

稲荷中江用水は平野の東で取水され、等高線に沿って平野の西側丘陵地の縁まで到達し、その後は段丘の平野への突出に沿いながら北上している。しかし、正善寺川を越えてからは丘陵を離れて府中に向かうように流れを変えており、前述のように用水の西側には四ッ屋遺跡があるのだ。水の流れは極めてルールどおりで、高いところから低いところへ向かう。北東方向へ斜めに進む用水は、西側に微高地があることで流路が規制されているのだ。

◆自然堤防と暮らし

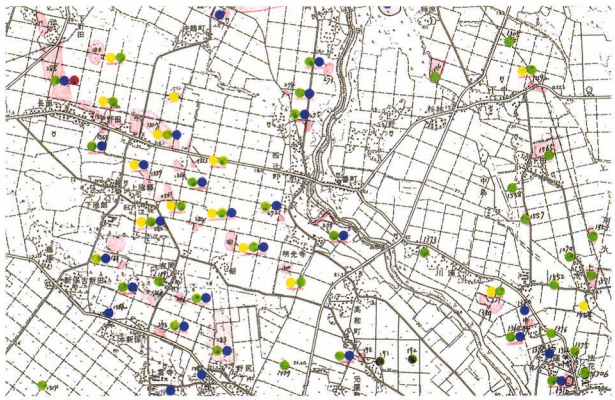
弥生時代後期の遺跡は、平野の低湿地にも確認されることが多くなり、当時の人たちが稲作の適地を求めて進出したことを示している。それらの遺跡は平野の関川右岸に見つかっていて、平野を南東から北西に向けて斜めに並んで確認されているのだ。今までは見つけることが不可能だった水田地帯に見つかっているのは、平成四年ころから始まったほ場整備

事業の事前調査によるところが大きい。

平野部は水田であることから耕作深度が稲の根が及ぶ範囲に限られ、人間活動があったとしても地上にその痕跡が露出することはない。したがって、高田平野に限らず水田が広がっているエリアでは遺跡が発見されることは少ないのだ。しかし、二千年間、水田耕作を続けてきた高田平野は、今回の大規模なほ場整備によって、遺跡が平野部でも発見されるようになったのだ。

さらに、遺跡の分布にも特徴がある。現代の河川とは明らかに異なるエリアで確認されること、線状に並んで発見されるのだ。この理由はいろいろ考えてみたが、現在の河川が何らかの理由で流路が改変されたもので、遺跡が確認された線状に伸びている場所が、かつての河川の流路だったと推測されるにいたった。

このことが、もやもやしていた平野を流れる河川が自然の状態ではなく、多くが人工のものであることを決定付けるきっかけとなったのである。



飯田川周辺の遺跡分布は地下の地形をよく示している
黄・緑・青などの点が並ぶのが旧流路



北陸新幹線が走る田園地帯
手前は整備後、後方は整備中の水田

◆ほ場整備の試掘と遺跡の発見

高田平野は昭和五四年までは全く遺跡の無い区域となっていた。筆者が上越市の文化財担当となったとき、一番の疑問が高田平野で遺跡が一箇所も無いということであった。その疑問は昭和五四年に室岡博先生の今池遺跡の発見で解決するのだが、この結果を教訓に平成になって始まったほ場整備で、事業の中断を回避するため事業地で試掘調査を行うことになった。その結果、高田平野では度重なる区画整理で多くの遺跡の上層が削られていることが判明することとなったが、建物の柱穴や井戸など多くの遺構が地下に埋蔵されていることも判明したのである。

「館」と「竹」という小字による武士の館の上杉とそれ以外の館を推測する方法もこの試掘調査から導き出した私案である。

平野部での遺跡調査から平野を利用した人々の年代も明らかになってきた。別項でも記したように、弥生中期には平野の中央部には進出していない、平野に進出するのは弥生時代後期になってからだ、それは長続きせず古墳時代では平野利用は限られた地域に偏る、そして平野全体に人間活動の痕跡が広がるのは奈良時代はじめ、八世紀前半ということが明らかとなったのだ。

◆平野に見られる段差

筆者が現在配属されている釜蓋遺跡ガイダンスが上越妙高駅西口にあることから、先に述べたように、和田地区の地域の歴史を書き留める作業に参加させていただいた。そのときに考え、寄稿したものから、地域の歴史を語るに欠かせない事柄を書き留めることとした。

和田地区には、弥生時代中期（約二二〇〇年前、実年代には異説もあるがガイダンスの展示によった）の遺跡がいくつか知られ、高田平野に稲作をもたらした人たちの遺跡と考えられている。弥生時代中期に属する遺跡は和田地区と大潟区



「越後国郡絵図」（頸城郡）に書き込んだ矢印は関川東側の点在する湿地（「大潟町史」より）







右上　飯田川の粘土質は掘削を示す
右中・下　山すそを縫うように開かれた上江用水は平野に出ると再び山すそに戻っていく

の砂丘南側に知られている程度で、上越地区の歴史を考える上では重要な位置を占める遺跡群である。和田地区の歴史を書く前に、筆者は探検と称して和田地区を何度となく走り回った。遺跡がどこにあるか、どこからどのような景観が望めるか、地形はどうなっているかなど、これまで遺跡（地域）を考える基本としてきた地形（大きく見れば地理的な視点）をくまなく見てまわった。

ある時、平野を東西に走る段丘のような段差に惹きつけられた。これは何だ？　早速帰って遺跡分布図を見る。この段差を境に遺跡がほとんど見られなくなっているではないか、その理由を考えてみた。河岸段丘は河川によって形成されるもので、河川と並行に見られるのが常識である。ところが、上百々から和田の寺町（高田の寺町ではない）にかけて確認された平野の段は、明らかに関川とも矢代川とも並行せず、両河川がこの段差の南で左右に広がっていることから、段差の形成に作用していないことが推測できた。なお、昭和二〇年に米軍が撮影した航空写真を見ると、段差の北側に川の蛇行跡が見られるので、その形成については要検討である。矛盾しているようにも思えるが、地形は長い歴史の中で時代の変遷を経て形成されたものであり、安易な確定はできない。

弥生時代中期の遺跡はこの段差の上にあり、段の下に降りることはない。それは弥生時代以降も長くこの傾向が続き、段の下で人間が住むようになるのはおそらく古墳時代後期、七世紀まで降ると考えられる。上杉景勝の頃に制作された越後国の絵図に湿地と考えられる表現が平野のあちこちに見られることもそれを示している。特に平野西側にそれが顕著であるのに、絵図は関川の東のみ伝えられているのは残念である

◆高田平野が穀倉地に

弥生時代に稲を高田平野に持ち込んだ人たちが、和田地区辺りに進出していたことは前述のとおりである。ところで、現在みられるように平野全体に水田が広がる景観はいつごろから形成されたのかを考えてみる。

筆者は以前から高田平野の河川が人工的に開削されたものが多い、というよりも既存の河川を生産活動に合わせて流路を変えてきたことを説いてきた。最も早くそれに気づいたのは正善寺川と櫛池川で、昭和五〇年代の後半である。正善寺川は、北陸自動車道の発掘調査で平山段丘が埋没していて、縄文時代前期（約五〇〇〇年前）の遺跡が調査されたことから明らかになった。河川は段丘を開鑿するが横断することはないからである。櫛池川は現在の国道一八号の発掘調査で川の斜面に古代の掘立柱建物が検出されて、それ以降に開削されたことが判明した。そしてそれらの河川には氾濫原といえる流路の周辺の湿地が無いことも共通していた。

同じ視点で他の河川も観察することとした。その観察結果から、飯田川は四辻町付近で急激に北に向きを変えて流れていることを確認した。このことは読者も地図ですぐに確認できるので、是非とも地図をご覧いただきたい。さらに戸野目川と重川を見た。両河川は地図上では山間地に達していなく、平野の中で地図表記が無くなっているのだ。用水の枝線ならいざ知らず、河川として表記されている川に源流が無いとはどういうことかを考えてみた。

重川は源流らしきものをたどると四辻町辺りに行き着くことがわかり、戸野目川は上雲寺辺りで無くなるようである。



砂利が見える富川付近の櫛池川



池付近の櫛池川は飯田川と同じ粘土質



中江用水は平野の中央を貫流する

これはあくまで地図上の判断だが、このことから重川は飯田川と、戸野目川は櫛池川との関連性を考えて見たくなる。結論をいえば、いずれの川も人工的に流路を変更されたといえるのだ。後で聞いたことだが、「三郷村村誌」にも同様の記載があるということであった。

◆湿地の解消と用水

これらから読み解けることは何だろう。

「絵図」のことを書いたが、描かれた湿地を解消するために櫛池川を関川に直接落とし、飯田川は保倉川に迂回させ、関川右岸の乾燥化を図ったと考えられる。湿地を解消できたとして、次に何が課題としてあげるかといえば、水不足ということになる。高田平野の穀倉地としての戦いは、湿地を解消して用水を潤沢に届けることにあったと考えてよい。

読者の皆さんも既にご承知のように、平野の東丘陵に沿って上江用水が流れ、関川右岸の中央には中江用水が南北に平野を貫流する。関川に沿っては大道用水が流れているように、上江用水から始まった用水は幾重にも開削された用水によって平野一円を穀倉地として維持してくれているのだ。

さて、平野の地下に眠る遺跡の分布は前述した。それがここで述べてきた、河川の流路変更と無縁ではないのだ。地中

の遺跡分布は自然に任せていた当時の河川の旧流路（流路はいろいろ変わると思うが）によって形成された自然堤防の証しなのだ。これがわかることで、高田平野で行われてきた土地の乾燥化と用水確保の戦いが、現実として理解できると思えるのだ。高田平野の用水は、尾根状に延びる地形に対応できるように先ず河川が切り換えられ、それらによって生じた水不足を解消する必要性が何本も並行して造られて、現在のような景観となったと考えられるのだ。

◆稲荷中江用水と御館川

前述のように、北陸自動車道から春日野にかけて用水が曲がっているのは遺跡を迂回するように開削されたことによるものだ。遺跡は周囲より高い土地にあるために起こる現象だ。御館川は逆に稲荷中江用水に接近することなく府中に近づいていく。御館川が本来正善寺川であったことは何度か示したことがある。また、本来の水量があったならば砂丘の後輩湿地に流入していたことも容易に推測できる。

このように考えると、正善寺川の付け替えは春日山城の裾野の乾燥化を促すために実施された対策で、それと同時に府中の乾燥化を促進して都市化を推し進める原動力になった可能性がある。

もしそうだとしたら、水量の減った御館川はある時期、天王川と接続していた可能性が高くなる。しかし、水量が減ったとはいえ大雨になれば春日山周辺の雨水は御館川に入って府中に押し寄せる。これを回避するため府中の直前で関川に落とすこととしたのではなかろうか。

天王川フォーラムのフロアーから、天王川の水量管理の話が提示された。水害から身を守るために天王川の水量管理をした時の情報だった。我々人間は水が無くては生きてはいけない。しかし、水は時に我々の住む場所に押し寄せて被害を及ぼす。この相容れない要素を持つのが水なのだ。

「水があって、水が無い」これは筆者が遺跡を考える時にお話しする言葉だ。用水と河川改造は、高田平野の地形を水田耕作に適するように改良した、先人たちの耕地整理の知恵の結晶といえる。

◆やはり越後府中から考える

今回からタイトルが変更になり、越後府中に限らず頸城一円を題材として取り上げるよう、編集部からの指示があった。ここ数年、笏谷石を求めて神社仏閣をめぐってきた佐藤氏と筆者からすれば、今回の対象地の拡大は当然のことと思えた。ところが書こうとすればするほど、話題が府中に戻っていくことを筆者は自覚した。

筆者はこれまでも町が動くことを書いてきた。国府から府中へ、そして福島城から高田城下町へ、そしてそれらは前者を移動させることで成立したものであった。このことは、都市（町）が農村、農業生産地へと変貌することを意味していて、人間の活動痕跡が地中に埋もれていくこととなった。また、そのような軌跡をたどるのは、人工の政治都市の運命であることも指摘できると思うのだ。

農地に変貌した都市としてよく知られているのは、織田信長によって攻め落とされた朝倉氏の「一乗谷朝倉氏遺跡」である。笏谷石の宝庫である一乗谷が地中から現れたのは、昭和四〇年代の半ばにおける耕地整理の最中だった。一乗谷に朝倉氏が都市を造ったのは、下剋上で越前の戦国大名となった朝倉氏が越前の国府に入ることができず、それに対抗するためだったと言われる。そして百年後、焼き落とされて水田に帰ったのだった。

越後府中は津にできた都市である。人が築いた都市は動いても、自然地形を利用した津は動くことが無い。都市としての越後府中の機能は福島城から高田城下町に移っても、津の機能は無くなることはなかった。一乗谷は天正元年（一五七三）から四〇〇年に及ぶ眠りについたが、越後府中は今も津の機能ゆえに連綿と生き続けている。

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越後（かみえちご）全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

発刊当初の直江津信用金庫は平成十六年一月高田信用金庫と合併、上越信用金庫となった。

あとがき

毎朝、小学生の通学隊に会います。体に不似合いの大きなランドセルを背負い、班長さんの後を遅れないように歩く一年生。その後を二～三年生、四～六年生と順番になり、最後の上級生がシンガリを務め注意を払っています。いつの時代もこの風景は変わりません。

ニュースで子供に関連した悲しい事故・事件が流れます。「令和」を良き時代にする責任は大人にあります。笑っている子供が一番かわいいのですから。（梅田）

目次

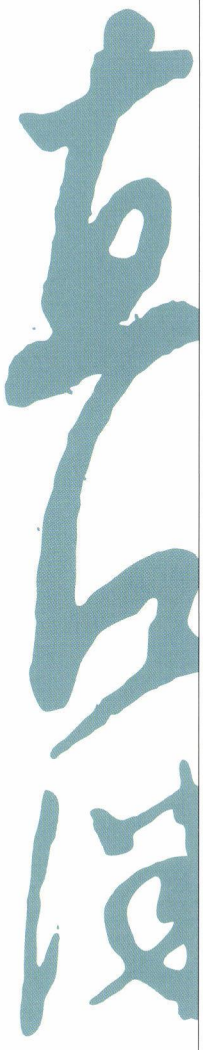
特集　ロングインタビュー
このまちの見方・活かし方　4
驚き、江戸時代生まれの座談会　12
頸城の空間を駆ける 国府―春日山―府中―直江津へ
川と用水
～高田平野を穀倉地帯とした主役たち～
上越市専門学芸員　小島幸雄　23
巻頭エッセイ・わたしの直江津
雨のち虹、そして晴れ　石川昌弘　2

「直江の津」
第一六巻一号　通巻四四号
発行日／令和元年六月一日
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／小林正夫
問合せ先／上越信用金庫営業統括部
電話（代）〇二五（五四三）三一八四
上越市中央一―十一―一
制作協力・北越出版

2019・1号

直江の津

発行／令和元年六月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■制作協力／㈲北越出版■表紙基本構成／小谷充■表紙構成／ムロハシデザイン



須布価格／五〇〇円（本体）